

マレガ神父収集文書の整理と保存

— バチカン図書館と日本による共同調査と交流 —

アンヘラ・ヌーニェス = ガイタン
(湯上 良：訳)

【要 旨】

マレガ・プロジェクトは、多分野間の共同作業の模範的事例であり、閲覧のために長期保存を行うことを主な目的としている。

まず、無酸素処理による殺菌を行い、次に各要素の構造を反映した整理番号を付し、調査票を記入する。日本の作業グループとの共同作業は、すべての基礎となるものである。

修復作業は、文書全体のデジタル化の準備段階にあたり、取り扱い時の安全性と高画素撮影を保証する。日本の文書素材は、西洋のものとは異なるため、金山正子氏や青木陸氏によって、バチカン図書館の修復士向けの特別研修が行われた。これにより、新しい技術を学び、日本のアーカイブズ素材に対応できるようになった。

このプロジェクトは、「歴史というものを自覚し、研究活動に配慮する教会は、真理を求めるすべての探究者たちとともに、過去の足跡と、時代を越えた保護活動によって受け継がれてきた宝物をともに分かち合う」という教皇レオ13世の考えを具現化しているのだ。

【目 次】

序 バチカン図書館における保存・修復に関する沿革

1. マレガ・プロジェクト

2. 修 復

3. デジタル化作業

おわりに—結論にかえて—

序 バチカン図書館における保存・修復に関する沿革

「フォンド・マレガ」(マレガ収集文書)の本質や、文書を閲覧(イタリア語で consultazione、英語で consultation。以下、同様)する際の基礎的な知識を理解する上で、非常に有益な他の先生方の論考と比較して、本論考は、この文書に関する作業の実務的な側面や、バチカンに保管された「フォンド・マレガ」の物質的側面、すなわち、その保存 (conservazione; preservation) について扱う。

世界の両端に位置する両国によって実施されたアーカイブズ・フォンドの整理や、協力関係

における実務的かつ、きわめて実践的な側面を話題とする。これらは、その後に行われる閲覧や研究にあたって必要不可欠なものである。したがってマレガ・プロジェクトは、東洋と西洋が一体となって取り組んだ作業のみに留まらない。ある特定の題材のみならず、広い意味での「歴史」に従事する、さまざまな専門家たちによる学際的な共同作業であり、模範的な事例でもあると言えよう。

過去に視線を向けることで、よりよく現在を理解できるので、本論考でも時代を遡ることから始めよう。

15世紀半ばのニコラウス5世によるバチカン図書館設立の決定は、閲覧と保存から成る2つの基本原則にもとづいて実行された。本論考で取り扱っているのは、まさにこの2つの概念についてである。しかし、この内の一方がなければ、もう一方も意味をなさないという当たり前の内容をこれから語ることをお許し願いたい。ある物を次の世代へ継承する義務について考えずに閲覧するということは、ある物を手に取って、利用することを妨げるような、物に対する「盲目的な」保存基準を適用することになるのだ。時代に応じて、何世紀もの間、バチカン図書館は、おおそ効果的な方法で、この2つの課題に取り組んできた。われわれの使命は、現在そして未来の研究者が継続的に閲覧できるように、託された物を保存し続けることである。こうした考え方が、閲覧と保存という2つの共存が見られるマレガ・プロジェクトの基礎を成しているのだ。

まず、バチカン図書館の修復士について、簡単に紹介したい。修復士としての立場は、前任者たちから受け継がれ、発展してきた。すでに触れた通り、伝承すべき言葉の伝道者として、バチカン図書館の創設時から、書籍等で構成される収蔵物に対して際立った注意が払われてきた。書籍を「修理する」装丁家や、欠落した文章を考証し、再生する書記たち *gli scriptores* が存在した。当時は書物を考古学的に深く検証し、取り扱うべき対象として考えず、書籍を単に延命していただけなので、現在行われる「修復」ではなく、「修理」と表現される。修復という考え方は、19世紀末に誕生し、フランツ・エールレ神父による先見の明に満ち、専門的な指導の下、広く認知された形で手稿本修復部門が創設された。神父は当時の図書館長で、図書修復に関する近代的概念の基礎を確立し、現在もそれは有効なものである¹⁾。実際、この修復部門は、ヨーロッパを始めとする海外でも先駆的なもので、模範となった。一機関内に設けられた、最も古い修復部門の一つであり、1890年代から今日まで継続的に活動していることは、決して偶然ではないのだ。

現在では、必要最小限の介入作業を行うという職業倫理の下、1. 構成要素の変化を最小限とし、2. 想定されうる外部からの要因や素材による干渉を低減し、3. 手作業で作られた物本来の寿命を引き延ばすような保存効果をもたらすという、3つの要因の間で常にバランスを

1) 1898年、エールレ神父による直接の招集で、サン・ガッロ修道院で会議（会議名は、会場となった修道院の名前で知られている）が開かれた。この会議は、現在でも書籍修復に関する近代的概念の出発点として考えられている。ヨーロッパの図書館関係者による歴史的会議であった。会議の最後に、損傷原因の科学的な検証なく修復作業を行わないこと、従事している素材の復帰可能性に最大限の配慮を与えること、手作業を尊重し、より効率的な方法について、国際的な情報交換を促進すること、などが採択された。

取ることに腐心している²⁾。

1. マレガ・プロジェクト

バチカン図書館東洋部門のスクリプトール〈書記官 *scriptor orientalis*〉、デリオ・ヴァニア・プロヴェールビオ博士の旺盛な好奇心によって、「フォンド・マレガ」は、2011年3月にバチカン図書館で再発見された。A書庫で見つかり、その時点では、1964年にラテン部門のスクリプトール〈書記官 *scriptor latinus*〉であったローラン神父が割り振った21袋に分割されていた。最初の作業は、21袋の配列に配慮しながら、特殊なプラスチック製の袋の中に対象物を入れ、予防的措置を施しつつ、無酸素システム³⁾を用いて、すべてのアーカイブズ・フォンドの消毒処置を行った。

次に対象物を目録化する段階に進む。日本からの作業グループ⁴⁾とともに作業したこの数週間は、作業工程すべての基礎となる。高度に組織化され、合理化された手法を用いた、鮮やかな仕事ぶりが印象的であった。

整理番号の構築を含む、基準の策定に取り組み、アーカイブズ全体に存在する各要素の配置を完璧な形で投影した、所在に関する基準を定めた。したがって整理番号は、段階ごとに整理され、階層構造のイメージ



図1 無酸素システム

から生まれた数値配列によって構成されている。各数値は出所、または次の「容器」を表し、目録化を行った際の正確な順番を反映している。整理番号の配列を後ろから見ていくと、完全な形で整理番号が再構築される。

整理番号の最初の要素は、ローラン神父が整理し、最初期に文書が入っていた各袋に対応している（A1、A2、A3から始まり、A21まで）。しかし、これは全く独断的な基準に基づくものであり、アーカイブズの元の構造を反映していない。元の配列は、すでにアーカイブズを発送する際や、輸送する間、決定的に変更されてしまったのだ。だが、再発見された時の状況を反映し、保存されるべきアーカイブズ・フォンドの一生における歴史的背景を正確に表してい

-
- 2) フランツ・エールレ神父の次の言葉を思い出さねばならない。「保存のために必要不可欠なことは、オリジナルの紙に対して、必要以上に深く、強度のある処置を決して行わないことである」。
 - 3) バチカン図書館は、殺菌用のシステムを採用しており、予防措置の段階でも、窒素を使った殺菌用無酸素システムを用いる。空気を入れた状態で封をし、特殊なプラスチックの袋に入れられた対象物は、機械に通した後、酸素が抜かれ、窒素と入れ替えられる。文書は最低でも22日間、この袋の中に置かれる。
 - 4) 人間文化研究機構 国文学研究資料館、東京大学、京都外国語大学、早稲田大学、国立歴史民俗博物館、大分県立先哲史料館、元興寺文化財研究所等から構成されるグループ。日本の機関とバチカン・イタリアの間を土台から支えたのは、京都外国語大学のシルヴィオ・ヴィータ氏である。

る。臼杵藩の書類袋の事例に見られるように、幸運にもいくつかのアーカイブズ・ユニットは、体系だった形で保存された元のアーカイブズ・ユニットと対応しているものもある。

次に、対象物自体の目録化にも取り組み、次のような流れで作業を行った。発見された資料を正確に撮影することから始め、寸法を計測した。次に、文書が手から手へ受け渡され、中央の机に運ばれ、そこで、文書の種類・寸法・中身に関する簡単な備考・日付・言語・保存状況など、いくつかの基礎的な情報がエクセル・ファイルに記録された⁵⁾。こうした流れ作業は、バチカン図書館の人員によってオリジナル文書の上に、鉛筆で整理番号を付されることで終了する。

日本とヨーロッパの間には、各文書への整理番号の付し方に違いがあり、その方法を巡って、発見と衝突を伴う最初の問題が発生した。日本では、整理番号は文書上ではなく、小さなラベルに書かれた後に再び糊で貼り付けられる。したがって、いつでも状態復帰が可能である。この方法では、外来の要素が元の文書上に入り込むことを防げる。それに対して、和紙の繊維構造は、鉛筆の鉛の成分を引き留めるので、いったん和紙に鉛筆書きをすると、それを再び取り去るのは難しく、結果的に元の文書の改変を引き起こす可能性がある、われわれに日本の同僚たちは、説明してくれた。しかし、バチカン図書館は、作業速度・実用性・安全性という3つの本質的な理由から、元の文書の上に直接、整理番号を書き込むことを決断した。なぜならば、鉛筆書きは、容易に消せないことは明らかだが、日本の仕組みもラベルを剥がす際に、紙の繊維と残った糊との間に跡が残ることを考えると、元の文書に、小さな改変をもたらす可能性がある。この点を考慮した結果、こうした決断に至ったのだ。

目録化に関係する事項を選ぶと同時に、西洋のアーカイブズ・フォンドとは形態上かくも異なる、東洋のアーカイブズ・フォンドの運用・保存する上での問題に、長期的な観点から取り組んだ。新しい種類の素材や用語を学習しなければならなかったし、漢字を習得しようと無垢な挑戦もした。さらに「フォンド・マレガ」は、均質なものではなかった。大部分の文書は、「状」と呼ばれる、巻かれて潰されたものから構成され、長さ20メートル以上の巻物もあり、「帳」と呼ばれる古典籍や、マレガ神父が入手した近代の書籍、さらにマレガ神父がフォンドの最初の調査とカタログ作成の期間に書いた手紙、紙や包み紙にした封筒、そして最後に輸送の際に用いられた紙（時には新聞紙）もそこに加わる。これらの内、最後の紙は酸性のもので、中性紙によって周囲から隔離されるように処置がなされている。

初期段階で、「目の前に立ちはだかる問題」と感じられた事柄は、われわれの仕事仲間である日本の方々との、緊密かつ効果的な共同作業のおかげで解決した。作業グループの到着前に、図書館で最初に会った段階から、青木睦氏⁶⁾によって提供され、本質を踏まえた助言の数々のおかげで、われわれの側での混乱は、すぐに乗り越えることができた。青木氏は、日本で文書アーカイブズがどのように保存されているのか、われわれに紹介し、保存に適したボール紙の箱を携えてきた。その箱の中で各文書は、一つ一つ薄葉紙に包まれ、箱内部の長辺に沿って置かれた中性紙の書類挟みの内部に挟まれ、棚の上で平行方向に箱を並べるためにこうした形

5) この段階で実施した最初の調査については、この後、紹介する。

6) 人間文化研究機構 国文学研究資料館。

になっていた。しかし、棚の上で平行方向に並べる方法は、作業スペースをどうしても節減しなければならないため、図書館側にとっては問題になった。したがって、上部が開く箱を垂直に並べる方法を選択し、箱の短辺に沿って各文書を包む書類挟みを立て掛け、上部の開口部から文書ごとの整理番号も見えるようにした。

文書に整理番号の最終版が割り振られた際、手書き文書用書庫の担当者は、箱の中に書類挟みを入れる。さらに各文書は、各書類挟みの右側と左側へ交互に並べられ、厚みの分のスペースを節約することになる。もちろん、文書を包む用具は中性紙で作られており、長期保存のために最適化されている。

書籍や文書で規格外のものは、箱の長辺に沿って平行に入れられた。

もう一つの懸案は、書庫内部のアーカイブズ・フォンド全体について、正確に全量を予測することである。まだ目録化作業が開始されていない段階に、予測するのは簡単なことではなかった。したがって、最初



図2 文書収納用の箱

に取り組めた仕事は、箱の初期管理を行うことだった。残念ながら、ドイツで作られた箱は、誤ったサイズのものが来てしまい、日本から来る最初の作業グループの滞在日程に間に合わなかった。当図書館所蔵の手書き文書を輸送する際に通常用いる箱で代用し、箱の中に厚紙の仕切りを入れることで、応急処置をした。この方法は、最終的に修復部門の狭い空間で作業をする上で、きわめて理に叶っていることが明らかになり、後の作業段階にも適したものであった。

作業をイメージするために触れるが、第2段階の作業は、A13の袋の目録化に取りかかったところで終了した。2015年9月の調査における最初の週には、すでに整理番号A19まで到達した。

2. 修復

われわれ修復部門がより深くかかわった作業段階は、間違いなく、文書の調査、そして次の段階の修復作業である。これは、両国の役割を補完し合う象徴的な事例である。

修復作業は、次の段階であるアーカイブズ・フォンド全体のデジタル化を実施するにあたっての予備作業となり、取り扱い時の安全性と高品質の画像を保証する。

作業の初期段階で、日本の作業グループは、各項目の保存状況について最初の価値評価を行った。青木氏や筆者のような修復の専門家による立ち合いの下、0から3までの段階で処置すべき損傷の程度を分類し始めた。0は損傷のないもの、1は軽度の損傷で作業の必要がないもの、2はデジタル化の前に、ある程度の修復作業が必要となるもの、そして最後の3は触れるだけであっても、事前の修復作業が必須のものとなる。

損傷段階1に分類された対象物に注意を向けつつも、修復作業の目的とは、古い対象物を作成された時点まで戻し、ある意味で「新しく」という考え方に基づくものではないという

ことを強調しておきたい。そうではなく、歴史的な出来事が対象物にもたらした傷跡をも尊重しつつ、できるだけ長く利用できるよう、最小限の処置を施すことなのだ。なぜならこうした事柄は、歴史的な情報を伝えているもので、それらは研究され、解釈されうることであり、またそうでなくてはならないからである。日本からの作業グループの面々も、修復でのこうした取り組み方で一致していて、「同じ言語で会話する」ことが可能であった。

検証された主な損傷は、

- * 虫による損傷。重度の高い事例では、文書のさまざまな部分が虫のただれや分泌物によって、紙を開いた際、互いに付着していた。
- * カビなど微生物による損傷。これらは、フェルトのように紙が固くなり、部分的に失われた状態を引き起こし、最終的には欠損をもたらす。日本語で「フケ」と呼ばれる。
- * 虫食いによる損傷。欠損し、しばしば溜まってシミになることもある。
- * 放置された湿気による損傷。結果的にシミとなるか、巻物がお互いに付着するか、開封や巻きを広げるのが非常に難しくなり、巻物が固まる。
- * 巻物を形作る紙の継ぎ目が付着した部分の欠損。
- * 力学的な損傷。主に文章上の折り目によって、デジタル化された画像において、文章が完全には読めなくなってしまった。

きわめて頻繁にさまざまな損傷が、同一文書内で見られた。

当図書館が実施している、すべてのデジタル化プロジェクトにおける実務作業と同じように、一冊一冊の文書は保存状態が記録され、安全にデジタル化作業を行うため、適宜修復作業が施され、修復部門を通過していく。マレガ・プロジェクトも例外ではなく、修復士は、修復作業を随時行うため、デジタル化の前に一つ一つの文書を点検する。

日本の素材が西洋のものとは大きく異なるという点については、一つ前置きをせねばならない。まず、書きつけられる素材の種類は、日本においては紙が絶対的に優勢な地位にある⁷⁾。しかし、「和紙」と呼ばれる日本の紙は、楮などを原材料とし、質の悪い昔の洋紙とは似ても似つかぬものである。繊維はより長く、強く、とても軽い紙



図3 損傷した文書

も作ることができる一方で、力学的な抵抗力は非常に高い。筆記する際の「媒体」も異なり、日本では墨を用いるが、西洋では^{もつしよくし}没食子インクの利用がほぼ支配的となっている。

洋紙を扱う修復士は、紙を再生する際、現代に製造された和紙を用いるため、扱いには慣れているものの⁸⁾、昔の手書き文書用の和紙を扱う際は、同じようにはいかない。

7) 西洋では、羊皮紙もきわめて頻繁に用いられる。

8) すでに触れたが、耐久力については中性の値が高く、したがって酸性紙とは異なるものであるという利点が考えられる。なぜならば、製造過程において、繊維を抽出する速度を上げるため、沸

1980年代から洋紙修復の世界は、日本に目を向けた。日本には、掛け軸や掛物と呼ばれる装飾用に吊るされる芸術的な巻物がある。すなわち、和紙と巻物状になっている紙に特化した、修復の長い伝統が存在するのだ。「本紙」と呼ばれる紙または絹の上に書かれた芸術作品は、裏打ちされ、枠をつけるために別の紙と絹の層が付けられる。掛け軸は、年中行事や季節に応じて、しばしば交換されるので、ある程度頻繁に巻かれたり、解かれたりするのだ。さらに各部が壊れた場合は、別のものと交換する。したがって、接着剤が掛け軸の造りにそくして、十分な柔軟性をもたねばならず、さらには元に戻すことができるようになっている。こうした長い伝統は、和紙で作られた素材への深い知識によって支えられる。日本の修復士たちがそれを披露することによって、西洋で洋紙の修復へと適用可能な新しい技術を学ぶ意欲のある者にとって、着想の源となるのだ。

さらに、形状や特性に関しても、異なるアーカイブズ素材に向き合うこととなった。優秀な修復士は、見かけ上は平凡であっても、実際には手工業の歴史において基本的な各要素を認識できるような、歴史に関する知見を備えていなければならない。西洋のアーカイブズ文書の事例でも、封印された手紙を開封する際、取り扱った物を再度統合しないように注意を払う。さて、この点でも新たな問題に直面することになる。日本のアーカイブズ文書で守り、伝えねばならぬ要素とは、どのようなものだろうか？

われわれが処置を行わねばならない日本のアーカイブズ・フォンドに関して、物質学や書籍学的観点から関連研究を明確に理解しなければならなかったため、マレガ文書の修復を目的とした特別な研修が必要となった。金山正子氏⁹⁾と青木陸氏を責任者として開催された、3週間の修復に関する専門家同士の交流などの素晴らしい機会に恵まれた。3週間という期間は、短く感じるかもしれないが、すでに基礎教育を受けた修復士同士がやり取りをしたため、教える側も、教えられる側も迅速に事が運んだ。彼女たちが日本に戻った後も、バチカンの修復士たちは、デジタル化の前にすべてのアーカイブズ・フォンドを修復し続け、現在もそれを継続している。

多くの経験を積み、包容力に富んだ2人とともに働くことで、欠損の修復、裏打ち、損傷を受けた巻物を開く方法など、修復に関する新しい手法や技術とともに、異なる素材に対応できる力をわれわれに与えてくれた。

素材に直接触れることを通じて、われわれは洋紙と比較して、和紙が修復作業に対して、きわめて異なる反応を示すことを知覚し、理解した。例えば、シミを作る危険を引き起こさず、和紙に水分を用いた作業



図4 修復のための研修

騰の瞬間、伝統的に木の灰などのアルカリ性の物質が加わるからである。

9) 元興寺文化財研究所。

を行うといったことなどが挙げられる¹⁰⁾。

われわれは、日本のアーカイブズ素材の特殊な要素について認識し、学んだ。例えば、巻物の最初の端にある小さな切込みは、巻物自体を閉じるためにあえて切られたもので、縫ってはいけないこと。または、日本のアーカイブズにも主題に沿ってまとめられ、異なる大きさの文書を綴じる習慣があり、これは、バチカン図書館のアーカイブズ・ファイルで見られるものと比べても、さほど遠いものではないことが理解できた。

次のような共同作業を行った。

＊レーヨンと水／布海苔を用いた、「状」の開封。巻物同士が付着している場合は特に注意を要する。巻物を開けることができなかった部分は、和紙同士が硬化し貼り付いている。

＊虫による深刻な損傷が見られる「状」の開封

と、複数の階層に渡って断片化した部位の再配置。ある種の「考古学的な発掘調査」とも言える、階層を特定する作業の基本的な事項として、「状」が他の「状」に巻き込まれている際、巻物自身がどのように折られていたのかという点に注意を払う。この際、帯状の紙を貼り付け、文章の特定の場所に注釈を付ける場合も同様である。断片を再配置する作業は、非常に複雑である。虫由来のシミや動いた跡などが、しばしば損傷と、該当する箇所の正しい位置を特定する助けになる。しかし、より複雑な事例では、日本語を母語とする方々の力を借りなければならなかった。日本からの作業グループが滞在していない時は、松浦一之介氏の力を借りた。彼は、デジタル化の全過程においてプロジェクトに協力した。



図5 修復の様子

＊裏打ちは、より深刻な事例のみで、常に「状」の元々の折り目に注意しながら行われる。われわれの思考回路では、文書全体への完全な裏打ちと比べ、非常に特別なものと考えてしまう。そのため、張力を均一化する処置を行いながら、欠損部分の再統合を行うという考え方がいまだ強く残ってはいるのだが。

＊紙や薄葉紙で欠損部分を修繕する場合は、ブラシと水を用いて欠損部分を埋め、形を整える。バチカンの修復士の何人かは、薄葉紙よりも薄い紙を使ったが、より厚い紙を用いた方が良かったのではないかと再考した。こうした失敗は、できるだけ最小限の介入作業を行おうとする癖がついているため、起こりうるのだ。

さらに、書籍のページの欠損部分を修繕する場合、日本の書籍における紙の特別な構造を

10) この点について、和紙では、洋紙の場合のように紙の形成過程の最後で、表面に塗料を塗らないという事実によって、おそらく説明されうるであろう。和紙では、紙を水に浸ける前に、トロロアオイから採取された粘着性のある液体を加える。これは、繊維を安定させることを助け、密な状態にすることを促す。

加味しつつ、ページの表と裏を区別することを常に想定している。わずかな事例で、澱粉糊ではなく、アルコール・ベースの接着剤¹¹⁾を用いた。

* 巻物の継ぎ目の再接合。

* 文書上の折り目を直す時は、ポリエステル製の薄い皮膜であるマイラーで覆われた鉄のテープの上で、紙に包まれた磁石を用いて羊皮紙の皸を取る、パチカンの技術を用いた。

3. デジタル化作業

修復作業の後、プロジェクトにおいて不可欠な次の作業段階は、資料のデジタル化になる。この作業は、図書館内にある修復部門の2階上で行われ、必要な場合には、写真家と修復士の間で意見交換ができるため、大きな優位性をもっている。この作業段階によって、画像データを通して、日本で行われるアーカイブズの目録作成が可能な状態になる。1月には、A1からA9までのデジタル化が完了する予定である。

おわりに—結論にかえて—

集中力を必要とし、細かく、忍耐を要する、長い作業の過程を紹介した。おそらく話の性質上、必然的に機械的で、退屈に感じられたかもしれない。しかし、実際に、このプロジェクトは、専門家の観点から見れば一つの挑戦であった。そして、各分野で高く評価され、才能に溢れた愉快な方々との出会いといった付加価値をもたらした。人間という要素は、過小評価すべきではないと考える。なぜならこれらの文書は、過去の人々について語っていると同時に、21世紀の今、こうした文書は、人々によっ

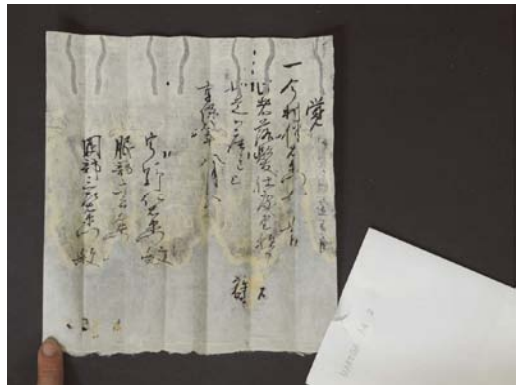


図6 修復された文書

て囲まれているからである。歴史とは人間を語り、人間によって営まれてきた事実を忘れさせないものである。それゆえ、これらの文書は、確固として存在している。

この後も消えることなく、残り続けてほしいキーワードは、保存 (conservazione; preservation)、閲覧 (consultazione; consultation)、学際性 (interdisciplinarieta; interdisciplinarity) そして、なによりも共同作業 (collaborazione; collaboration) である。なぜなら、これらすべての要素は、マレガ・プロジェクトの中で完全に共存しているからだ。

現在のパチカン図書館の建物が開館した際、レオ13世は、次のような考えを述べた。「歴史というものを自覚し、研究活動に配慮する教会は、[中略] 真理を求めるすべての探究者たち

11) クルーセルG。

とともに、過去の足跡と、時代を越えた保護活動によって受け継がれてきた宝物をともに分かち合う準備が整ったのだ」¹²⁾。こう主張したレオ13世の考えを、マレガ・プロジェクトは、まさに具現化するものであるといえよう。

（訳者追記）本稿の訳出にあたり、青木氏、金山氏のご協力に対し、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

12) R. Farina, «*Splendore veritatis gaudet ecclesia*», *Leone XIII e la Biblioteca Apostolica Vaticana*, in *Miscellanea Bibliothecae Apostolicae Vaticanae* 11, Città del Vaticano 2004 (Studi e Testi 423), pp. 285-370: 333.